

# 松井和総先生の「思考力・表現力を育む授業を目指して」について

愛知教育大学 飯島康之

計算さえできない。でも計算練習だけの数学の授業に満足したいわけではない。「就職していく生徒」が高校でどういう学びをすべきかについて、松井先生がいろいろな試行錯誤の中で自分なりの授業の姿を作りつつあるのを実感する発表だった。

「平方完成の練習に数時間かけ、生徒も努力したのを実感して、期待しながら定期試験をしてみたら、その結果に愕然とした」という内容は、印象的だったが、それにめげるだけでなく、就職したときに通用する力として、「生きる力」その中でも思考力・表現力を彼らなりに身につける場面を仕掛けていこうとするところに共感した。

普段と違った授業スタイルで思考力・表現力を育む授業を目指してみたときの、意外な手応え。その感覚はぜひ大切にしていきたい。一方、授業後のアンケートでの「今日の授業は何をしていたのかわからない」などの言葉への感覚も大切にしていきたい。

松井先生が指摘するように、目の前の生徒に「適切な難易度をもつ課題」を「発問」という形で提示することは、とても重要であると同時に、「生徒に合わせていくことが不可欠」だ。生徒の反応を手がかりに、どの程度の難易度の発問が適切かを明らかにしていくことも重要だ。一方、問題理解の場面でさまざまなやりとりを生かしていく中で、生徒の思考力・表現力を生かしながら「授業への参加度」を実現していくことを考えると、単に発問だけでなく、生徒の表現（ことば、式、図など）をうまくつなげていく指導力を伸ばしていくこともまた重要だ。

また、印象的だったのは、協議の場で多くのベテランの先生から、経験を踏まえたいろいろなアイデアが出されたことだった。